

メッセージアウトライン

ローマ14：1～6「食べることと食べないこと」

[1-2]「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません」

ここで言われている「信仰の弱い人」とは、信仰の道に入ったばかりの人というより、当時の状況から見て、ユダヤ教的、律法主義的な考え方にとらわれていた信仰者たちのことをパウロは考えていたと思われる。旧約聖書を背景に持つユダヤ人クリスチャンは偶像に備えた肉を食べることは身を汚すことと考えて、そのような可能性を絶つために野菜しか食べなかった。これに対して「何でも食べてよいと信じている」クリスチャンもいる。すべてのものは神によって造られたものであり、偶像の神というものは実際には存在しない。それゆえそのようなものに供えられた肉を食べても問題はないと考えていた。しかし、そのような人に対しては「信仰の弱い人を受け入れ、その意見をさばいてはいけません」と言われている。

[3]「食べる人は食べない人を侮ってはいけなし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです」

ここでは考え方の違うお互いがさばき合うことが戒められている。その理由は神がそれぞれを受け入れてくださっているから。神がすでに受け入れてくださっている者をどうしてさばくのか。人を正しくさばくことのできるのは神のみである。

[4]「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです」

この「他人のしもべ」とは比喩的にキリストのしもべとされたクリスチャンのことを指す。一人一人はキリストのしもべであり、主にあって兄弟姉妹であるが、一方が仕え、他方が仕えられるという関係ではない。信仰が弱いと思われる人も、主は立派に信仰生活を全うできるように立たせることのできるお方である。それゆえ他の信仰者が先走ってさばく必要は少しもない。

[5-6]「ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです」

当時の律法主義的ユダヤ人クリスチャンは旧約聖書の過越の祭り、仮庵の祭り、初穂の祭りなどを特別に守る人々がいた。しかし信仰による義を強調する人々はこういった考えを強く排除した。パウロは信仰の本質にかかわらないこのような問題に対しては、お互いがさばき合うのではなく、各自が自分の心の中で確信を持ち、自分の判断で対処するように教える。6節はこれまで語られてきたことの結論。信仰の強い者も、弱い者も、浅い者も、深い者も、すべては主に感謝し、主のために、主に喜んでいただくために行っている。このように信仰者は互いにさばき合うのではなく、互いに助け合い仕え合い、受け入れあって神に喜ばれる生き方をしていくことが求められている。